



ぱらぱらマンガ喫茶展「いろんなこ」

2025. 3/19 Wed. - 25 Tue. (会期中無休)

Open: 11:00 - 18:00 (最終日のみ 17:00 まで)

会場: ブックハウスカフェ店内ギャラリーこまどり (東京・神保町)



ミノムシ文芸祭

2025. 4/26 Sat.

Open: 11:00 - 16:00 (入退場自由)

会場: あとリエミノムシ (京都・今出川)



文学フリマ東京 40

2025. 5/11 Sun.

Open: 12:00 - 17:00 (最終入場 16:55 まで)

会場: 東京ビッグサイト 南 1-4 ホール

入場料: ¥1,000

パ ロ ル

vol.



PAROLE

Sukimaki Newspaper
PAROLE Vol.9
March 14, 2025
<https://sukimaki.com>
@sukikara_makiko



SUKIMAKI ANIMATION

2007年に鋤柄真希子が立ち上げたアニメーション・スタジオ。
2010年以降は松村康平と共にマルチプレーン撮影台を使った短編アニメーション作品を制作している。
現在、動物と植物が織りなす宇宙を舞台にした新作 SF ファンタジー『LUNATIC PLAN(e)T』を制作中。

絵本『ねこはねこのゆめをみる』 (¥1,980)

スキマキアニメーションのネットショップにて販売中。
<https://sukimaki.stores.jp>



スキマキアニメーション
ネットショップ

*『LUNATIC PLAN(e)T』 制作日記

空間の影

ガラスのコップが映し出す光の反射を見て、光のアニメーションを作りたいなと思った。そこから5年かけて『深海の虹』(2019)が完成。アナログ技法を中心に光の表現をふんだんに盛り込んだ作品で、完成直後は「やり切ったぞ!」と思っただけ、今またガラスのコップの光の反射のことを考えている。でも、今度は光ではなく影の方。三次元のモノに光が当たったり通過することで生まれる二次元の影。光源、光が当たるモノ、影が映し出される平面、そのどれかが動くとも影も形を変ええる。影が変容する様を見て現実ではありえない空間の歪みを感じることがある。アニメーションは一コマ一コマをコントロールできるので、素材の置き換えによってライブラクションとは違った動きや効果を作り出せる。『LUNATIC PLAN(e)T』の世界を不思議な違和感がある影の空間で表現してみたいと考えている。キヤラクターと同じくらいの比重で空間の存在感が際立つ作品になればと思う。

現在『LUNATIC PLAN(e)T』の脚本は完成していて、22のエピソードで構成されている。(すごいボリューム!) それぞれのエピソードは短い散文詩のような内容で、繋がっているような繋がっていないような時間感覚が狂ってしまう感じ。これまでの作品は冒頭から順番に制作することが多かったけど、今回は閃いたところから作り始めたい。イメージの断片を積み重ねていくことで何か予想外のものが生まれるかもしれない。

(銅柄真希子)

＊『LUNATIC PLAN(e)T』：地球から月へ移り住んだ動物たちが植物にメタモルフォーゼし、森を作るというSF作品です。クマ、ウサギ、ネズミ、オオカミ、フクロウなどたくさんの動物が登場します。キリンは銀杏、ゾウはセコイア、といった具合にその動物の形から連想される植物へ姿を変え、本来ならありえない生態系の森を作っていきます。

種の話

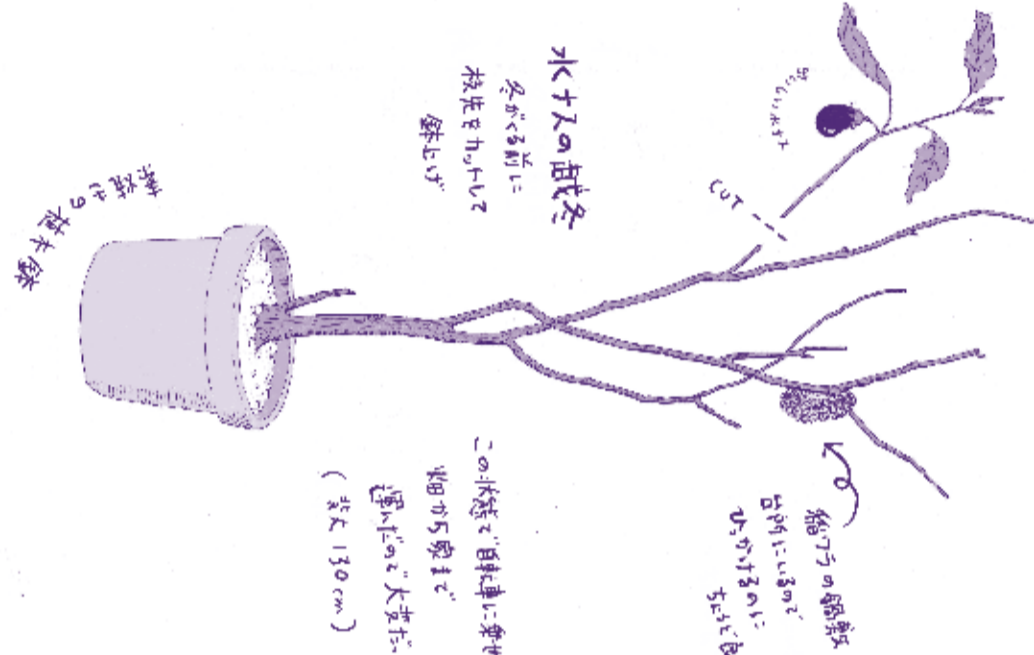
自然農の人たちはみんな「自家採取」を勧めている。「自家採取」とは育てた野菜を全部食べずに種取り用として残し、次の年にその種から育てること。お豆みたいな「種」を食べる野菜は固くなるまで収穫せずに放っておけばよく、お芋も保存に気をつければ割と簡単だ。難しいのは「実」を食べる野菜やアブラナ科の野菜。例えば、トマトやナス、ダイコンやキャベツ。これらは種から苗を作るのが難しかったり、交雑といつて他のものと混ざってしまったりする。

私は一昨年前から畑を始めたので今年で畑歴 3 年目になる。初年度から種取りできているものはオオムギとサトイモのふたつ。オオムギはメルカリで購入した六条大麦で、夏に麦茶

を淹れて楽しんでいる。サトイモは隣の畑のおじちゃん分けてくれたもの。その土地で毎年みんなが育てている赤目のサトイモ。夏になるとカラーに似た薄い黄色い花を咲かせる。サトイモが花を咲かせるのはとても珍しい。種芋をくれたおじちゃんには芋に栄養がいなくなるから花は摘んだ方がよいと教えてくれたけど、なんだかもつたいなくいつも咲かせたままにしている。

種取りを続けていくと野菜がだんだんその畑にあったものになっていくらしい。その年の気候、土の状態、小さな種にたくさんの記憶が刻まれていく。大昔の記憶も忘れずに覚えていくのだろうか。昨年植えた水ナスがとても美味しかったので種取りをした。手順通りに種取りできたものの苗作りに自信がないので、思い切って本体を越冬させてみることにした。水ナスはまあまあ大きさに成長していて、草ではなく木と呼ぶ方がしっくりくる。冬が来る前に水ナスの木を鉢上げして、家の中で一緒に過ごしている。ナス科は本来は多年草なので越冬できるか分からないけど、5月になったら畑に植え戻そうと思っている。水ナスは我が家で過ごした記憶を忘れないでいてくれるだろうか。

(銅柄真希子)



散歩する無意識 — 松村康平映画評—

『ザ・ルーム・ネクスト・ドア』

(2024) ペドロ・アルモドバル

A FILM BY ALMODÓVAR というクレジットが映画の始まりを告げる。アルモドバルは冒頭クレジットにおいて決してフアーストネームである Pedro を表記しない。それはこの映画に関わったすべての者たちが、この映画に出逢うすべての者たちが個に回収されることなくアルモドバルという名の下に一時でも集め他者へ思いを馳せることを望んでいるかのようだ。アルモドバル監督はこれまでのキャリアの中で一貫してクイアネス (初期にはキッチュなものとヤコメデイリリーを交えて) を描いてきた。著者が幾度となく出逢い直した女性讀歌三部作『オール・アバウト・フイ・フザー』(1999)、『トーク・トゥ・ハー』(2002)、『ホルベール (帰郷)』(2006)をはじめ、アルモドバルは群像劇を得意としてきた。しかしその作風は時代を下るごとに二人の間だけに起こるより親密な関係性へと収斂していくように思われる。『ザ・ルーム・ネクスト・ドア』の中で『トーク・トゥ・ハー』を彷彿とさせるバルコニーのシーンが反復されるが、ソフアに横たわる二人の女性の後ろには寄り添う男たちの存在はもはや必要ない。

『ザ・ルーム・ネクスト・ドア』はアルモドバル自身初となる英語による長篇作品である。これまでのスペイン語で描かれてきた作品からも明らかなように、アルモドバル作品の登場人物たちは演劇性を纏いよく喋る。スペイン語を母語とする監督と役者たちによって生み出された独自のテンポによる会話の妙、誤解を恐れずに言えばそこには官能的な響きが横溢している。アルモドバル作品のリズムは、カット割りにも増してこの音声トラックと朋友アルベルト・イグレシアスの音楽とによって決定されている。

しかしスペイン語を手放した本作のスタイルは、尊厳死を通して生と死に向かい合うという不可避的なテーマに合致しているように思える。母語から離れることで他者性は強化される。アルモドバルは本作で自分の中に潜む絶対的な他者=死を見つめ寄り添うことの覚悟を示そうとしたのではないだろうか。(尊厳死を遂げるのに慣れ親しんだ場所じゃない方がよいという主人公マサの思いは、『ホルベール (帰郷)』において死ぬ時は自分が産まれたベッドの上で願うアグスティーナと異なる。このことは監督自身の死に対する思索の変遷を垣間見るようだ。)

テイルダ・スウインソンとジュリアン・ムーアの圧倒的な演技を雪が降り積もるように愚直なまでの丁寧な切り返しショットで重ねていく。いずれそれは話している人物を捉えるだけでなく、ただ耳を傾け聴くもののショットを等価に描き出していく。信頼によって個が剥がれ落ち生者と死者が混ざり合う一瞬々々。アルモドバルは本作で話すことよりも聞

くことの尊さを描きたかったのではないだろうか。

生者と死者の境界が融解するさまは、二人のフアクションによっても助長される。これまでの作品では服の色や形状によって登場人物がキヤラクタライズされていたが、本作では二人が代わる代わる緑のタートルネックを着用する。(決して二人同時にこれを纏うことはない。)二人が別荘で共に過ごしはじめ、「あ、このニット、イングリットがマサにもらったのかな?」などと思っ観ていると次の日にマサが着ている緑のニットはイングリットのものよりも厚手であったことに気付かされる。全く同じものを着ているのではないにせよ、死にゆくものと残されるものが等しく緑のタートルネックを纏うなどということはこれまでのアルモドバルの演出ではなかったことだ。

アルモドバル作品では、喧嘩した直後に和解しないまま二人は抱擁し合う。アグスティーナの意見に激しく反対した直後に抱きしめるライムズダ (『ホルベール (帰郷)』)。ベニグノが起した罪の後、信頼を裏切られた同僚は自分が寄り添うことはもう出来ないが、友人のマルコにその役割を懇願する (『トーク・トゥ・ハー』)。尊厳死には懐疑的だがマサに寄り添うことに決めたイングリット (『ザ・ルーム・ネクスト・ドア』)。たとえ意見を異にする友人や家族であろうとも、他者を拒絶しない包摂さ、見捨てず思い続けること。近年、体調の不良を訴えているアルモドバルだが、心身の許す限りまた新たな作品を生み出してくれることを切に願う。

(松村康平)

